

3歳児における集団形成

——集団の認識過程を中心に——

研究第8部 星 美 智 子
常 富 夏 子
藤 本 椒 子

I 目 的

近年来、3才児からの集団保育が重視され、普及されつつある。しかし、保育内容や保育技術に関しては、従来の4～5才児保育から推移して、つまり程度を下げて施行されていることが多い。3才児集団には4～5才児集団と質的に異なる特殊性をみることができる。これは、昨年度の「集団構成に及ぼす玩具の役割」の実験

(44年度当研究所紀要第6集掲載)でも明らかであった。本研究では、個々の集団認識の発達過程の分析と、集団そのものの成長過程から、3才児の集団形成の独自性を検討し、3才児保育のための基礎資料をうることを目的とする。

II 方 法

対象は、都下M団地の幼児グループ(3才児保育)の子どもたちである。1964年度より1970年度の7年間、各年度の人数35～40名。保育期間は4月から翌年3月までの1年間で、週2日、1日2時間保育である。保育者は3名。うち1名が主として子どもの行動観察に当る。

(1) 個々の集団認識をみるため、集団で行動することを、保育のなかに毎回組み入れて観察する。集団行動は自由あそびから保育者の呼びかけで集合すること、順番を待つことの二つをとりあげる。集合は、つぎの保育に移る行動として、保育者の全体への呼びかけで、(1)椅子に着席すること、(2)椅子からいっせいに立つことの行動を観察する。待つことでは、(1)赤・黄・青に分けられたグループ別、(2)男女別、のように、順番でおこなう保育場面をとりあげ、子どもたちの成功・不成功から、性別・グループ別の所属意識の有無を観察する。なお、赤・黄・青のグループは、各年度とも、生活年令の小さい順に三分したもので、保育中はそれぞれ赤・黄・青の色のスカーフと名札をつけている。

以上の「着席」「立つ」「男女別」「グループ別」の

観察項目について、①保育者の全体への呼びかけですぐ理解する、②さらにうながされて理解する、③個別的な働きかけで理解する、④まちがえる、理解できない、⑤拒否する、の段階に分けて記録する。さらに集団行動の前後の状況(とくに性別・グループ別では呼ばれた順位)、個人の関連事項(おしゃべりをしていて保育者の呼びかけに応じられないなど)を記録する。

観察対象は、70年度の赤グループ12名(4月の入園時、平均年齢3才0月22日)である。これは、前年までの予備調査の結果、全体観察では記入洩れをまぬがれないこと、また最年少の赤グループ(いわゆる早生れの1～3月生れの子たち)に3才児集団の特徴が顕著であることを得たからである。

(2) 集団生活の理解をみるため、1日の保育の流れと集団のまとまり、脱落者、妨害者を中心に保育日誌をつけて記録する。これは保育担当の3名の話しあいでもとめ、3名が分担記録していく。1964年度から1970年度までの7年間の記録により、各年度を通してみられる共通の3才児集団形成の特徴をみる。

III 結 果

1. 個人観察による集団ルールの理解

まず、集団行動への参加状況から、集団認識をさぐ

る。毎回記録用紙に観察記入されたものを、「着席」「立つ」「男女別」「グループ別」の4項目に分けて、それぞれ個人個人の集団参加の行動を、「理解する」、「うな

がされて理解する」、「個別的働きかけで理解する」、「まちがえる、理解しない」、「拒否する」の行動分類にしたがって集計する。日によって出席人数の移動があるので、赤グループ出席人数100としてパーセントに換算する。

集団生活の全体の発達から、4月から3月までをつぎのIV期に分ける(結果2.参照)。70年度は、第I期4~5月(保育日数第1回~第14回)、第II期6~7月(第15回~第27回)、第III期9~10月(第28回~第40回)、第IV期11月~翌3月(第41回~第70回)。

第I期~第IV期別に、行動類型のパーセントで比較したものが第1表~第4表であり、各期回数が異なるので平均値で示したものである。

1)「着席」は、第1表に示すように、第I期から87%の子どもが、保育者の指示にしたがって行動できる。第1回でも83%の子ができており、椅子があるということで、他の三つの集団行動に比べて早くから理解される。第III期に合格率が落ちているのは、夏休み後の乱れが響

第1表 着席(各期別平均) %

	できる	催促で可能	個別的催促で可能	できない	
第I期	87.3	3.0	2.1	7.6	100.0
第II期	91.3	2.6	0	6.1	100.0
第III期	86.5	0	1.7	11.8	100.0
第IV期	92.5	7.5	0	0	100.0

第2表 立つ(各期別平均) %

	できる	催促で可能	個別的催促で可能	できない	
第I期	75.1	0.9	1.8	22.2	100.0
第II期	79.6	2.6	3.7	14.1	100.0
第III期	86.5	2.1	3.8	7.6	100.0
第IV期	94.4	5.6	0	0	100.0

第3表 男女別(各期別平均) %

	できる	催促で可能	個別的催促で可能	できない	
第I期	68.1	0	0	31.9	100.0
第II期	82.6	12.9	0	4.5	100.0
第III期	83.4	11.1	5.5	0	100.0
第IV期	75.8	13.3	8.7	2.2	100.0

第4表 グループ別(各期別平均) %

	できる	催促で可能	個別的催促で可能	できない	
第I期	50.0	27.2	0	32.8	100.0
第II期	63.9	20.4	5.5	10.2	100.0
第III期	65.1	23.1	2.5	9.3	100.0
第IV期	94.4	2.8	2.8	0	100.0

いている。これは、第II期までに「集合すること」を理解したものが、あとで理解できなくなったことではない。たとえば、ぼんやりしていたり、遊びに熱中していて保育者の呼びかけを聞き流す、あるいは拒否することが記録されている。

2) 着席して、保育者の呼びかけで、いっせいに立つことは、第I期の75%から第IV期の94%まで順調にのびている。「着席」が第1回にできない子が17%にすぎないのに、「立つ」ことは、第1回目は42%の子ができなかった。第I期の平均でも「立つ」ことのできない子は「着席」できない子の3倍になっている。そして経験を重ねるごとにできるようになっていく。

3) 男女別に呼ばれて、正しく反応するには、まず自分の性別を知ることが必要である。7月現在(ビネーテスト施行)で性別の解らないものは10人のうち1人であった。4~5月である第I期はこの数より多いことも考えられる。しかし個別的に質問すれば性別を正しくいえる子も、他の子にひきずられて行動してしまうことがみられる。「着席」や「立つ」行動とちがいで、全員いっせいでないことが、むずかしくさせている。第I期で32%のものが間違ったり、できなかったりしている。しかし、第II期以後は20%前後になる。

4) グループ別の呼びかけは、第4表にみるように、第I期の平均で50%、半分の子はまだ所属意識が判然としていない。赤・黄・青の色は知っていても、何グループかを聞くと解らない子が多い。第IV期には急にはっきりしてくることが明らかである。この時期には、スカーフや名札の色の手がかりがあるだけに、男女別より混乱が少なくなっている。

5) 各項目および知能指数との相関関係を見ると、第5表の「男女別」と「グループ別」の相関がもっとも高く0.73で、「グループ別」は、他の「着席」や「立つ」とも相関がみられる。なお、知能指数との相関では「男女別」が $r=0.65$ で、相関があるといえるが、他の「着席」「立つ」「グループ別」とは相関がみられない。

6) 各個人——途中の退園、入園を除く10名について

第5表 各項の相関

r=上段
P.E.r=下段

	着席	立つ	男女別	グループ別
立つ	0.38 0.182	—	—	—
男女別	0.12 0.209	0.46 0.167	—	—
グループ別	0.25 0.156	0.57 0.144	0.73 0.099	—
知能	0.17 0.207	0.14 0.209	0.65 0.124	0.37 0.184

て、第I期から第IV期まで全期の平均成功率をみる(第6表)。全体でみると、「着席」「立つ」「男女別」「グループ別」の順に成功率は低くなっているが、個人個人では必ずしも一定していない。成功率のもっとも低い子どもe。(女)は、集団のなかで緊張しており、第III期ははじめまで毎回うながされて集団行動に参加する。とくに第I期は、はにかんでかたくなに拒否している。b. d. h. の3人の男の子は、成功の段階に達したあと、IV期に入って、同じ日に3人揃っての不成功がしばしばみられ、成功率を低くしている。第IV期頃にこの3人の友だち関係が発展し、遊びつづけたりふざけていて、保育者の呼びかけにすぐに応じないことができてきているのである。したがって、集団行動の成功・不成功だけで集団認識をみることはできない。e. のようにルールを理解していても行動できない子どももある。またb. d. h. のように逆戻りのばあいは、成功率の上昇過程で集団ルールの理解をみるべきであろう。

2. 集団全体のまとめ

まず、保育日誌に記録された行動を各年度別に、保育

第6表 個人成功率

年令 (4月 現在)	I. Q.	着席	立つ	男女別	グループ別	平均
a 才月 3:2	86	91.3	79.2	54.5	75.0	75.0
b 3:2	100	89.4	96.4	90.9	86.7	90.9
c 3:2	112	96.2	96.4	90.9	73.3	89.2
d 3:1	110	88.0	89.8	72.7	64.2	78.7
e 3:0	110	60.0	51.8	63.6	46.7	55.5
f 3:0	120	100.0	85.2	100.0	86.7	92.9
g 3:0	125	96.0	92.6	90.9	92.9	93.1
h 3:0	108	89.4	92.9	80.0	71.4	83.4
i 3:0	105	100.0	60.0	44.5	53.9	64.6
j 3:2	90	92.9	84.6	57.1	54.5	72.3
M 3:0	108.5	90.3	82.9	74.5	70.5	79.6
SD	20.88	11.87	17.35	15.68	15.30	13.56

日ごとに、つぎの4項目に分類する。4項目は、1)母子分離、2)集団所属意識、集団規則の理解、3)課題遂行、4)自他未分化であり、それぞれに関連した行動をとりあげる。各年度を通し、そこに一定の集団全体の質的变化の時期がみられた。したがって、1年間をIV期に分けることとする。すなわち、4~5月を第I期、6~7月を第II期、夏休み以後の9~10月を第III期、11月から翌3月までを第IV期とする。各期を保育回数でみると、第7表になる。7年度平均で、第I期14回、第II期14回、第III期14回、第IV期30回である。

1) 母子分離

母子分離は、母親と離れる時に泣く、母と離れても朝のうちちょっと泣く、途中「家へ帰りたい」と泣くなどを、母親と離れたいものとしてここに含める。第I期

第7表 各期保育回数(年度別)

—集団経験回数—

各期	年度	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	平均
第I期 (4・5月)	1~15	1~14	1~12	1~13	1~14	1~14	1~14	1~14	1~14
	15	14	12	13	14	14	14	14	13.5
第II期 (6・7月)	16~31	15~29	13~26	14~27	15~28	15~28	15~27	15~28	15~28
	16	15	14	14	14	14	13	14.5	14.5
第III期 (9・10月)	32~50	30~44	27~40	28~40	29~40	29~40	28~40	29~42	29~42
	19	15	14	14	12	20	13	14.0	14.0
第IV期 (11月~3月)	51~83	45~77	41~67	41~67	41~72	41~70	41~70	43~72	43~72
	33	33	27	27	32	30	30	30.3	30.3

記録例 1 (母子分離)

年度	第Ⅰ期 (7回目)	第Ⅱ期 (21回目)	第Ⅲ期 (35回目)	第Ⅳ期 (57回目)
'64	A. K. 泣く	A. K. 玄関の外で母と別 れられる		O. T. 母に甘える (参観日)
'65	I. S. 朝泣きあばれる			
'66			U. K.、O. I.、K. K母に 甘えて離れない(遠足)	
'67	M. U. 泣く、O. I. 朝泣か ないが、時々思い出し泣く			
'68				
'69	D. T. 朝入り口で大泣き			
'70		I. D. 「帰リタイノ」と 泣く	T. D. がM. M. につられ て「帰ル」と泣く	

では多いとき10人(第3回生2日目)も泣いている。1日平均では2.3人である。第Ⅱ期には第Ⅰ期のとき泣か
第Ⅰ期 第Ⅱ期 第Ⅲ期 第Ⅳ期
2.3人 1.3人 1.2人 0.2人

なかったものが、緊張がとけて泣くのが特徴的である。第Ⅲ期は、夏休み後、9月はじめに集中している。第Ⅳ期は、母と離れることで泣く子は殆どみられなくなる。記録全体を記載できぬため、記録例として、各期中

間の1日(第Ⅰ期第7回目、第Ⅱ期第21回目、第Ⅲ期第35回目、第Ⅳ期第57回目)の記録を記載する(記録例1~3)。

2) 集団所属意識、集団規則の理解

第Ⅰ期は、個人個人ばらばらで、友だちの家で遊ぶことの延長にすぎない子も多い。したがって、入園前からの仲良しが休むと泣いたり、その友だちと一緒に行動できなかつたりすると大ききする。1日の日課をのみこ

記録例 2 (集団の理解)

年度	第Ⅰ期 (7回目)	第Ⅱ期 (21回目)	第Ⅲ期 (35回目)	第Ⅳ期 (57回目)
'64		O. T. 友だちのおべんとうほしがる	画用紙をくばる当番2人、一生けんめいやる	
'65	D. T. 仲良しが休んだので泣きどおし		先生の話のとき、自分で話した子がある	
'66	外遊びのため靴をはくと、掃毛と間違える子多い	鬼ごっこでつかまえた相手の名がまだいえない		
'67	組別を無視して、仲良しと並ぶ子多い	K. K. ゆうぎの番に当らず泣く		劇あそび、出番を待つことがむずかしい
'68	V. K. 歌えば帰れると思い「早く歌イタイ」という	女の子のとき、男の子3人出てくる	2人組で遊ぶ、相手がいやとこねる子なくなる	劇あそび、1人1人がどの役もやりたがる
'69	O. I. 仲良しと離れて坐らされ大泣き	S. T. リズムの途中でいやになりぬけ出す	おくれがちの子の世話をやく子ができた	ゴムとび、10数えて交替すること1回の指導で子ども同志でできるようになる
'70	はりえのため机出す、おやつと間違える子多い	組別・性別が青グループの子は殆どできる		

めずに、机に向うとおべんとうを出したり、歌を歌うと帰れると思ったりしている。保育者の全体への働きかけで行動をとれず、ひとりひとりに働きかけると納得する状態である。第Ⅱ期は、緊張がとけてふざけたり妨害したりする子が出てくる。入園前の友だち関係がくずれて、他の子とあそぶようになつたり、そのためとり残された子が泣いたり、友だち関係のトラブルが目立ってくる。第Ⅲ期は、集団のなかのひとりとして、まわりを意識するようになる。赤・黄・青のグループの所属もはっきりしてきて、仲良しと別れて所属グループの行動が

とれるようになる。むずかしいこと、新しいことにはとまどうが、繰返し行われたことは、保育者の全体への働きかけで行動できる。第Ⅳ期になると、毎日の日課が理解でき、時間的流れのみこんで保育者にさいそくしたりする。全体を対象に話す保育者に従って行動できるようになる。

3) 課題遂行

課題について、a生活習慣・集団の日課、bリズム・歌あそび、c運動、d絵・製作の四つの小項に分けて記録を整理する。記録例はリズム・歌あそびに関連する行

星 他：3歳児における集団形成

記録例 3 (課題遂行—音楽・リズム)

年度	第Ⅰ期 (7 回目)	第Ⅱ期 (21 回目)	第Ⅲ期 (35 回目)	第Ⅳ期 (57 回目)
'64	リズムあそび「ちょうちょ」 意味のわからない人数人			「かごめあそび」よくできるようになる
'65				「かごめあそび」のルールわかってあそぶ
'66				
'67		「どんぐりころころ」喜んでする、相手を上手に選ぶ		
'68	「子どもの王様」みられる意識なく皆よくやる	お早うの歌、やり直しさせる、やり直しの意味解る	楽器、カスタネットの待つ所、叩く所間違う	リズム楽器一応まとまってくる
'69	H. Y. S. T. の王様、いやがる	リズム体操一度注意するとよく守る	楽器待つこと守れない、叩くと歌がおおる	「かごめあそび」先生が抜けてもあそべる
'70	中央に人数ずつ出す、呼ばれないのに出る子3人	ロンドンブリッジ、女の子はできる、男の子ふざける		リズム遊びはまだはっきりにしていない

動の、各期の中間にあたる日の記録である。

a 生活習慣・集団の日課 下駄箱やかばんかけは2回目で大体の子がのみこめる。出席カードをはるごと、スカーフをつけることは5回目ぐらいになると忘れる子がいなくなる。10回前後に出席カードを貼ることの意味がのみこめ出席のはげみになってくる。また三角のスカーフをたたんでしまうこともできるようになり、第Ⅰ期の後半に習慣化できていくが、自分でスカーフをとめ具でとめるのは第Ⅳ期になる。

b リズム・歌あそび チューリップの歌、片づけの歌など2～3回は殆ど歌わないが、4～5回になると半分の子は歌うようになる。第Ⅲ期になると、新しく聞く歌も保育者が2～3度歌うとよくおぼえる。どなるように歌う子もでてくる。第Ⅳ期には、簡単な役割のある劇あそびや「かごめ」の歌あそびなどができる。タンバリンとカスタネットのリズムあそびも2～3人の子が間違える程度になるが、輪唱はむずかしく、卒園間近でも先生のリードがあってもなかなかうまくいかない。64年度と67年度の子どもたちが卒業近くに辛うじて成功している。

c 運動 第Ⅰ期では3才児後半の子たちだけが片足立ちができ、第Ⅱ期には殆んど両足とびができ、第Ⅳ期には片足とびが全員できるようになっている。各年度で、ひとり、ふたりの子が床上20種、幅15種の平均台を渡れない子がいる。

d 絵・製作 第Ⅰ期は絵は錯画の子も多く、のりつけなどむやみと沢山つけてしまう子が多い。第Ⅲ期になっ

ても適量ののりをつける子は半分ぐらい、折紙をきちんと折ることがうまくいかない子も多い。はさみ使いがこの時期には大部上手になる。第Ⅳ期後半になると、錯画の子は殆んどなくなり、どの子もお面づくり、ペーパーサイド作りなどそれらしい形が表現できる。

4) 自他未分化

ここでは、自他の未分化、立場の交換ができない、見られる自分と見られる自分の区別ができないなどの行動をとりあげた。第Ⅰ期では、保育者にやり直しを命じられると「先生ノ意地悪!」と怒ったり、後片づけせずに机の下に玩具をかくし「モウナイヨ」といったりしている。仲良しの子の隣りに坐りたくて、隣りにいる子のひざに腰掛けてしまったり、自分と同じおやつをみて自分のを盗られたと泣く子すらいる。第Ⅱ期になると2か月の経験を通して著しい成長をみせる。しかしまだ、他の子に「机の上に乗ってはいけない」と注意したあとで自分が机の上に乗ってしまったり、電話ごっこで交互に相手と話すことができなかつたりしている。Ⅲ期では集団のなかの自分を理解してきて保育者の話を皆できける。だが、夏休みのひとりひとりの報告など、終わった子がまた話したり、だまって他の子の話を聞くことができない。競争場面でどの子も「一番」といわれて皆満足している。第Ⅳ期になると、ことばで「順番々々」と自分のはやる気持をおさえたり、なかまとのトラブルを先生にいつけずにはばいたりもする。鈴かくしのゲームなどはまだ後でこっそり鳴らすことができず前で鳴らしたり、かくしてられず自分から鬼に教えてしまったりする。

Ⅳ 考 察

以上の結果を統括しながら、3才児の集団形成の過程を考察する。

1) 3才児保育の1年間の経過を7年度にわたって観察し、各年度、対象児がことなるだけに、それぞれの構

成する集団の持ち味のちがいがみられた。しかしまた、3才児が初めて集団生活の経験をして集団行動を身につけていくプロセスには、各年度を通して共通の線相をみることもできた。すなわち、4月入園時から5月まで第Ⅰ期、第Ⅱ期は6～7月、第Ⅲ期9～10月、第Ⅳ期11月から翌年3月の段階で集団の質的变化がみられることである。

2) 集団生活への適応過程を、a 母子分離、b 集団所属意識・集団規則の理解、c 課題遂行、d 自他の未分化の側面から検討する。

第Ⅰ期は、母と離れる不安の強い子が全体の殆どを占める。しかし、泣く子は数人であり、他の子は緊張して集団のなかにとけこめなかったり、集団への参加を拒否する態度をとる。一方、抵抗なく行動している子もこの時期は、集団がみえずに家庭の友だち遊びの延長である。集団生活の日課や規則は、よくのみこめないが数回の経験で子どもなりに理解する。混乱がおこるのもこの時期後半の特徴であり、帰りの挨拶の歌の経験から、保育中他の歌を歌っても帰宅と間違えたり行動が多い。

第Ⅱ期は、集団に慣れ、1日の保育の流れも解ってくる。この時期は個々の子の緊張がとけて活気づくが喧騒もまぬがれない。保育者が全体に働きかけても、自分がその対象のひとりであるということが解らなかつたり、理解しても行動できなかつたりしている。

第Ⅲ期は、はじめの数回は、夏休みのあとなので逆戻りの現象がみられる。母と離れにくくなつたり、集団の日課にのれなかつたりする。この時期をすぎると、徐々に集団の成長がみられる。クラスを三つに分けたグループの所属意識もはっきりしてくる。遠足や運動会の新しい経験でこの時期が終了する。

第Ⅳ期は、子どもたちが集団のひとりとしての意識をもち、それが行動面にもあらわれてくる。保育者の全体への働きかけを理解して反応する。しかし、子どもたちが順番に報告する状況では、全体を意識することができない。先生の所へ寄ってきて話したり、皆にきこえない声で話したり、一度終ってもまた話したりする。劇あそびなども待つ側にまわれず、どの子も毎回出ようとする。リズムあそび、絵画製作、運動ともにこの時期に能力の発達が顕著である。

3) 入園時3才0か月～3才2か月の子10人について、集団行動の発達を観察する。観察は、自由あそびから椅子に着席すること、椅子からいっせいに立つこと、

男女別に行動すること、グループ(赤・黄・青の3グループ)ごとに行動することである。これらについて、保育者が全体を対象に働きかけた時の個人個人の成功、不成功をチェックする。第Ⅰ期に「着席」は87%でもっとも成功率高く、「立つ」75%、「男女別」68%である。グループ別は各自グループの色別のスカーフをしているが、成功率は50%にすぎない。「着席」は第Ⅱ期に、「立つ」は第Ⅳ期に90%台に達する。「男女別」は第Ⅱ期から第Ⅳ期まで80%前後、「グループ別」は第Ⅲ期まで60%台で第Ⅳ期に急に上昇して90%に達している。第Ⅰ期は集団の一員である認識がないため、個人的働きかけを多く必要とするが、それもことばでのうながしや、働きかけには応じられない。保育者が手をひいたり身体にふれて参加させることが多い。身体を通して教えられ、第Ⅳ期にはじめてことばだけのうながしで「着席」「立つ」ができる。性別・グループ別はそれぞれ所属認知はあっても、他にひきずられたり、自分がみえず、行動をおこさずに成功していると思っていたりしている。したがって他の子の間違いはよくわかって指摘する。

入園時、はじめての集団生活にとまどう個々ばらばらの3才児が、3月卒業期に集団としてのまとまりある行動をとれるようになる。この集団形成の過程を分析した結果、3才児集団形成の特質は、つぎの点にしばることができる。ひとつは子どもの1年間の能力の発達の顕著さである。当初、両足とびができず、はさみが使えず、錯画を描いていた子どもたちの1年間の成長ぶりは、すでにそれらを身につけている4・5才児にはみられないめざましさである。もう一つは、自他未分化で自分を対象化できないこと、ピアジェのことばをかりれば「脱中心化」の問題であり、これが4・5才児にみられない混乱をおこしている。

以上2点を特徴とする3才児が、集団生活という場においての経験を重ねることによって、互いに刺激をうけ、保育者に指導されながら、さまざまな能力をのばし、それなりに自己を対象化することが可能になっていく過程を本研究によって明らかにすることができた。

この研究に際して、保育や記録を担当していただいた遠藤尚子、小林千鶴子、釜谷青子、吉田正子の皆さんに感謝いたします。

Grouping of the Three-Year Olds —Process of cognizing a Group—

Dept. 8 Michiko Hoshi
Young Children's Group
Natsuko Tsunetomi
Yoshiko Fujimoto

The purpose of our study is to clarify how the children of three years old, who experience a group life for the first time in their lives, come to cognize a group and begin to join in a group life, thereby to get materials useful for nursery care technique.

1) Studying the records of the nursery care of the three-year-olds for 7 years, we chose the following 4 items: a) separation from mother, b) consciousness of belongingness to a group, c) completing a given task and d) undifferentiated state of self and others, and observed the development of the three-year-olds for one year. As the result of this observation, we decided to divide a year into 4 stages in view of the grouping nature: the first stage (for two months from April when the children begin to attend kindergarten), the second stage (June~July), the third stage (Sept.~Oct.), and the fourth stage (from Nov. to March next year). In the first stage—anxiety resulted from the separation from mother and bewilderment at facing new experiences are observed, and consciousness as a group member is not seen. In the second stage—the children become accustomed to a kindergarten life being in a sort of confusion. In the third stage—as it is after summer vacation, the children show the state of retrogression in grouping. The grouping is settled in the latter half of the stage. In the fourth stage—the children begin to show the consciousness as a member of a group. Remarkable progress is also seen in individual ability. But behaviors that cannot differentiate an individual from a group, self from others are still remaining.

2) We observed 10 children ranging in age from 3:0 to 3:2 at the time when they began to attend kindergarten to see whether they could act in a group as had been told by teachers. As to the directions, "Rally!", 80% of the children were able to follow them in the first stage. In the second stage 80% of the children could follow the instructions "wait" and showed "the consciousness of belongingness" to a small group set in a class. Observing the children who couldn't act in a group, we found that from the first stage to the third stage it was when they were urged to do something being touched on the body that they succeeded in doing. In the fourth stage they could act in a group individually on a verbal urge.

Comparing with the groups of the four-year and five-year olds, we noticed the following 2 characteristics in the group of the three-year-olds: 1) Motor ability as well as other abilities remarkably developed in one year. In the first and second stages, in many cases, the children couldn't perform the given tasks because their abilities were still undeveloped. 2) The children couldn't differentiate self from others, that was, they couldn't objectify themselves.

In our study we could analyze the process of the three-year-olds, who showed the above-mentioned two characteristics, developing their abilities and objectifying themselves, experiencing a group life.